早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
(2899-2

W
学位論文
2899
2

博士（人間科学）学位論文 概要書

# 村落社会と「出稼ぎ」労働の社会学的研究

## ——諏訪地域の酒造労働と村・家・個人——

２０００年１月

早稲田大学大学院人間科学研究科

矢野 晋吾

指導教授　河西 宏祐

本研究は「出稼ぎ」労働移動の社会的性格の解明を通じて、日本社会における労働の社会的性格の一端を明らかにすることを射程としている。

従来、日本社会における農業労働は、伝統的に稲作という画一文化をもち、封建制に縛られた主体性のないものとされてきた。研究史では、これが解消されたのは、高度経済成長期に拡がった賃労働化と「村落」、「家」の解体によるとされている。

本研究は現実に労働の主体として行為を行う人間の視点から、労働観を再検討することを試みる。鍵としてとりあげたのが「出稼ぎ」である。「出稼ぎ」は、労働力移動の一形態であり、生業複合を前提にして移動を伴い、母村・就業先などとの社会関係を形成している。研究史で封建制から脱した契機とされる農民の賃労働化を孕みながら、伝統的に日本の広範囲で存続してきた。

「出稼ぎ」研究の課題としては、①「出稼ぎ」の規定、②類型化、がまずあげられる。

①については「出稼ぎ」の社会的性格から定義付けした。先行研究で曖昧だった当事者の「態度」と「時間」を検討し、「出稼ぎ」を行動論理ととらえた。そして、「家と家業経営の維持・継承を前提とする態度をもちながら、家業以外の有償労働に労働力移動を行う行動論理」と規定した。

②については、「出稼ぎ」の論理が現象した形態について整理を行った。先行研究で混同してきた様々な「出稼ぎ」を、社会的性格に基づいて「伝統型出稼ぎ」と「賃労働型出稼ぎ」の２つに分類した。両者は「出稼ぎ」の母村の村落構造との関連等で対照的である。これにより、様々な「出稼ぎ」の形態を個別に論じていた研究史の整理が可能となった。

この整理を踏まえ、日本社会の労働の性格を色濃く反映する「伝統型出稼ぎ」に焦点をあて実証的に分析した。具体的には長野県諏訪郡富士見町瀬沢新田区の酒造「出稼ぎ」について、個人、家、村落の３つの位相から社会的性格とその経時的変化について考察した。

個人の位相では、ライフステージと生年層で区分して分析した。その結果、「出稼ぎ」は社会規範として機能していた。目的はライフステージで異なるが、概ね自発的に出て、出ないと周囲から否定的な評価を受けた。若い世代では「出稼ぎ」者がいなくなるが、冬季忙しい施設園芸や通勤兼業を選択したからであり、「出稼ぎ」の論理は生きていた。

家・家業経営との関連では、通勤兼業をしていた息子が帰農した事例を取り上げた。息子の帰農と親の引退で、労働力配分の単位が世代から個人（夫婦間）に変化した。息子は既に酒造「出稼ぎ」に出ない世代だったが、本人も周囲も抵抗なく選択した。季節「出稼ぎ」と通勤兼業は、同じ論理に基づいているため、相互転換が起こりうるのである。

もう一つの特徴が、「村づとめ」との関係である。父は、消防団や区役員、区長などに就任した際、重要な収入源であった酒造「出稼ぎ」を休止した。「村づとめ」は、経済的には概ねマイナスだが、村内での安定した地位を築くことにつながる。その意味で、家業経営は時にその効率性よりも「村落」との関係性を重視した形で行われる。労働力も家業経営ではなく村落運営を優先して振り向けられていた。

村落との関連をみると、酒造「出稼ぎ」は、特殊技能獲得による昇進性、パーソナルな結合による集団「出稼ぎ」形態、「出稼ぎ」先との緊密な情報疎通などの特徴をもち、「出稼ぎ」先での地位・威信が村落内のそれと強く関連していた。それゆえ、行動の選択に当たっては、経済的要因に加えて社会的、文化的要因が強く作用していた。

先行研究では、「出稼ぎ」が村落の紐帯を弛緩すると論じてきたが、「伝統型出稼ぎ」

の一つである当地の事例では、むしろ「出稼ぎ」をセットした村落システムに適合的な労働移動として展開してきたのである。

以上のように、事例では個人が行う労働という行為は、家、村落など周囲の社会構造に埋め込まれていた。土地という家業経営の資源を持たない人も、酒造「出稼ぎ」に精力を注ぐことで、農業経営上の階層だけでなく、社会的評価をも上昇させることが可能である。そのため、人々は積極的に「出稼ぎ」に取り組んできた。いうまでもなく、この村落構造は村人が自ら作り上げたものである。

日本の労働、とりわけ農林漁業労働は、単一よりもセット化こそが常態であったと考えた方が自然なのではなかろうか。農民個人、家、村落は、多様な生業を状況に応じて自在に取り入れ、セット化する。極めて柔軟性に富んだ構造をもっていたのである。